



Title	志賀直哉『或る男、其姉の死』論：作品区分の再検討のために
Author(s)	モハンマド, モインウッディン
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 84-97
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70986">https://doi.org/10.18910/70986</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 志賀直哉『或る男、其姉の死』論

## —作品区分の再検討のために—

モハンマド モインウッディン

### はじめに

数百に上る作品がある志賀直哉の作家としての生涯は前・中・後期に三区分されるのが通例であるが、いつからいつまでがどの時期に当たるのかについての記述はあまり見られない。例外的に平成二十三年に出版された『志賀直哉の〈家庭〉女中・不良・主婦』において古川裕佳はその前・中・後期として、「初期（明治四十三年『白樺』創刊号に『網走まで』を発表してから、大正三年『兎を盗む話』まで）、中期（大正六年『城の崎にて』で創作活動を再開してから、改造社版『志賀直哉全集』（昭和十二～十三年）刊行によって長篇『暗夜行路』を完結するまで）、後期（その後、主に戦後）」のように明確な時期を記している。が、その理由は述べられていない。

三区分以外にもこれまで色々な区分が試みられてきてはいる。『日本近代文学大事典』で本多秋五は高田瑞穂の区分説に賛成し

て、「戦う人」の時期<sup>③</sup>、「和解する人」の時期<sup>④</sup>、「眺める人」の時期<sup>⑤</sup>、そして「回想する人」の時期<sup>⑥</sup>の四区分について叙述している<sup>⑦</sup>。一方、西垣勤は、三年間（大正三年発表の『兎を盗む話』から大正六年の『城の崎にて』まで）の空白を挟んで、前・後期の二区分説を立てている。氏は「前期は対立・葛藤の文学であり、後期は、和解・調和の文学である」と定義する。西垣は三年の沈黙は大きな意味があり、「この三年間を真ん中にして志賀の文学は大きく変わるのであって当然の区分けということになる。」と強調する。西垣の二区分の仕方は須藤松雄も支持しているが、氏は志賀文学を自然の側面から捉えようとして、志賀の文学を「対立的自然関連」から「調和的自然関連」への変化と理解する<sup>⑨</sup>。

上に取り上げた区分の仕方には作品の内容よりも作者の実生活が多く関わっていると考えられる。志賀直哉の父との対立・和解が、そこから多くの作品が生まれたことは周知の如くであるが、これらを彼の生涯にわたる作品群の区分の基準にすることは現在

においては妥当であろうか。周知の如く、直哉の代表的な作品の多くは「実生活に従う」ものであり、それに対し「フィクション」はあまり評価されて来なかつた。今までの区分のしかたは、多くのフィクションや未定稿などを過小評価したのではないかと考えられる。実生活には直接関わっていると思われないさまざまな作品をも視野に入れて再検討すべき時期に来ているのではないだろうか。人の考え方や生活習慣、そして周りの環境などが作品に反映されることには避け難いが、そうだからと言つて作品が完全にそれらを写し取つているとは言えないだろう。故に、作品の背景になつてゐる実生活に過重な注意を払い、作品に書かれた他の側面を見逃すことにならないだろうか。

先に紹介した先行研究のすべてに共通するのは三年間の空白期間であり、その前を対立や葛藤の時代、その後を和解や調和の時代と見る傾向が顯著である。周知の如く志賀直哉と父との対立は大正六年の「和解」によって終わり、これによつてその後の志賀の実生活は変化し、それを題材とする作品の性質も大幅に変わつた。本多や西垣の区分を念頭におきながら作家の実生活を追つて見れば、確かに三年間の沈黙後にもたらされた父との和解を中心点として、以前の時期の志賀の生活には周囲との対立・葛藤があり、和解以後の時期には周囲との調和が見られる。

### 一 先行研究と問題の所在

ところが、作品に描かれた内容に従えば、「和解」以前の時期の全作品にいつも対立・葛藤があるとは言い難い。たとえば、『網走まで』（明治四十三年四月）、『孤児』（明治四十三年七月）、

『彼と六つの女』（明治四十三年九月）、『速夫の妹』（明治四十三年十月）、『鳥尾の病氣』（明治四十四年一月）、『イヅク川』（明治四十四年二月）、『母の死と新しい母』（明治四十五年二月）などにおいては葛藤や対立などは主たるテーマとなっていない。他方、「和解」以後の作品で必ずしも調和が見られるとは言い切れない。たとえば、作者の実生活における葛藤の根源だつた父子関係から得た素材を扱う作品である『憐れな男』（大正八年四月）、『謙作の追憶』（大正九年一月）、「或る男、其姉の死」（大正九年一月六日から三月二十八日連載）や、父子関係以外の素材を扱う作品『十一月三日午後の事』（大正八年一月）、『挿話』（大正十一年）などに「調和」や「和解」の空氣を見出すことは困難であり、これらの作品を和解や調和を表する作品と呼ぶことは適切ではないだろう。作品の中の世界において所謂葛藤や対立あるいは和解や調和が主要なテーマでなくとも、それらを「対立・葛藤の文学」、「和解・調和の文学」と言えるのだろうか。

こうした点に焦点を当てつつ、本稿においては「暗夜行路」に次いで二番目に長い小説『或る男、其姉の死』を取り上げ、作品内容の分析を踏まえながら志賀直哉の創作活動の区分の仕方を検討したい。

『或る男、其姉の死』<sup>11</sup>は大正九年一月六日から三月二十八日まで四十回にわたつて、『大阪毎日新聞（夕刊）』に連載された。そ

の二十六年後、作者志賀は本作品を書いた意図を以下のように述べている。

この小説は「和解」といふ小説と對になる作品で、「和解」では和解を主に書き、不和の事實は殆ど書かなかつたが、これでは寧ろ不和を主にし、丹念にその原因を追及して書いたつもりである。(『或る男、其姉の死』あとがき)<sup>(12)</sup>

周知の如く「和解」に直接的には不和の原因が記されていないことは、『和解』発表當時から批判されてきた。それらに対しても志賀は応えたこともある。『「唇が寒い」——福士幸次郎君に』(大正十一年三月)においては、彼は批評家に次のように直接応えている。

あの作に対する其頃の月評が「兎に角和解を書きながら、不和の原因を殆ど書いてない事が欠点だ」かういった。(中略)然し自分はあの作の中で、不和の原因を書かうとすればきりがない、といふ事を再三、書いてゐる。さう繰り返し、云つてゐる作者が、何故それを書かなかつたか、或ひは書けなかつたか。そしてさう云ふ氣持を批評家は何故察しないのかと自分は思つた。自分から云はすれば「和解を書きながら、不和の原因を書かぬ欠点」を挙げる代りに、「不和の原因を少しも書かず、和解の効果をあげる事が出来た」事を何故認めないと云ひたい。

『唇が寒い』が発表された時すでに『或る男、其姉の死』は新聞に連載されているが、この隨筆の中では、『或る男、其姉の死』

の内容について一言も発言されていない。<sup>(14)</sup>ところが、二十六年後突然先のように「『或る男、其姉の死』あとがき」(以下、「あとがき」と言う)が発表されたのはなぜかと考えざるを得なくなる。

また、「あとがき」に書かれたことに対する、次のような疑問が浮かんでくる。『或る男、其姉の死』は「『和解』といふ小説と對になる作品で」あるなら、なぜ「和解」と同じスタイル、すなわち主人公自身を語り手にしたり「ありのまま」に従つたりせずに、虚構とはつきりわかるものを使つたりしたのだろうか。兄を主人公として、弟が兄と父の葛藤を語るという形をとる必要があつたのだろうか。そして、「『和解』といふ小説と對になる作品」として「不和の事實」(『あとがき』)を書くべきだったのに、虚構とはつきりわかる「兄」や義兄などを用いて、父との間の確執を再び描いたのはなぜなのか。「和解」は事實、「或る男、其姉の死」は事實と作り事との混合である。(『創作余談』)から、いくら「一つ木から生えた」(『創作余談』)「枝」と言われても同じ視点で両作品を見ることには無理があるのでないだろうか。両作品は「一つ木から生えた」「枝」というよりは、同じ現実という土壤で育てられた二本の別々の木というべきかもしれない。故に、『或る男、其姉の死』を一つの独立した作品として考えるべきだ

本作品に関する先行論文は、志賀直哉の代表作『和解』や唯一の長編小説『暗夜行路』と比べようがないが、その数は極めて少ないとは言えない。従来、弟の設定の必然性、事實と虚構の混合

や『暗夜行路』の時任健作との比較<sup>(17)</sup>、草稿類との比較<sup>(18)</sup>、「暗夜行路」草稿21<sup>(20)</sup>との類似性や夏目漱石『こゝろ』の影響への発言<sup>(19)</sup>、主人公の変貌や姉の「痣」の意味、登場人物の反省などといった視点から本作品は論じられてきた。中で「兄の変貌」については、「最後まで全く明らかにはしない」<sup>(22)</sup>、「腑に落ちないのは、たとえば、『或る男、其姉の死』では父子の和解が不成立のまま終わっている点である。(中略) その不和とは、最終的には和解にいたるような性質のものでなければならないのではないだろうか。」<sup>(23)</sup>

「主人公の姉という存在についてはまったく掬い取ることができない」<sup>(24)</sup>などのような批判があるものの、「弟」という語り手をあえて設定して兄の反省を描いたこと、さらに兄自身の手紙を用意したことを考えると、そこに「中」と「外」から「反省」的に自己を映す試みがあつたことは疑えないだろう<sup>(25)</sup>、「というようないい」<sup>(26)</sup>と言及もされている。

富沢成実にも指摘されたように、本作品に関する多くの研究においては、「或る男、其姉の死」について「繰り返し語られた作者自身の言葉をそのまま引き受け、研究の前提としながらそれぞれに展開されたもの」<sup>(27)</sup>が見られる。作者はいわゆる〈和解・調和の時期〉にいたにもかかわらず、なぜこのような作品を書く必要があつたのかについて納得できる論考は見当たらない。作者の意图について発言されても、繰り返しになるが、それらは作者が『創作余談』などにおいて言及したことを前提にしていると言え<sup>(28)</sup>るだろう。下岡友加の言葉を借りて言うと、本作品の設定は「作

者にとつては実に都合のいい方法であ<sup>(29)</sup>り、この論考では作者がいくつかの機会で発言した内容から離れて作品世界に集中して、本作品における父子関係について考察を行いたい。

## 二 「弟」の設定が持つ意味

『或る男、其姉の死』の中の弟の取り扱いについて志賀は「現代日本文学選集『和解』はしがき」(細川書店昭和二十三年八月、原題は「作者の言葉」)において次のように述べている。「(前略)父と子の不和を主人公の弟の立場で書いた。姉といふ架空な人物などを出して、私の実生活とは離れたものにしたが、父と私との不和の心理だけは出来るだけ追求し、それを弟が両方に同情を持ちながら、批判的に書いたといふやうなものだつた。(後略)」「弟」が父と兄「両方に同情」を持つように描いたことは、まさに作者自身がこの作品を書いていた段階にそのような視点を持てるようになつていたということを意味するのではないか。先行研究では、この「弟」は不可欠な登場人物という扱いをしているものが多い。以下、このような捉え方に基づいて考えてみたい。

本作品においては「兄」と「弟」が主な登場人物として描かれており、兄は主人公で、弟はそばで觀察する人物となつてている。直接兄の口から彼の考えが表わされることはないが、たまに弟に話すこと(例、「私(注弟)にこんな事をいつた事があり」(三))などのようなと、姉宛の手紙において兄は自分の考え方を表わしている。志賀直哉には主人公兄弟が登場する作品はほかにもあ

り、『暗夜行路』の主人公と兄の「信行」、『和解』の主人公の弟「順三」などを見てみると、いずれの場合も主人公（一方は弟で他方は兄である）自身が語り手になつており、そばで観察する弟などはない。物語の中心人物をそばで観察する人物としての副の主人公（兄か弟いずれの場合も）という設定の例は、『或る男、其姉の死』以外は見られないだろう。

志賀の他の作品に見られる「兄」や「弟」は以下のようである。

「母は十七で直行と云ふ私の兄を産んだ。それが三つで死ぬと、翌年の二月に私が生まれた。それつきりで十二年間は私は一人だった。」（『母の死と新しい母』二）

「私の生まれる半年程前に三つで死んだ兄がある。祖母に云はせると、それは利巧者だったさうだが、守が、使ひの出先で何か食はせたのが原因で、腹をこはし、死んで了つた。

（『流行感冒』上）

兄の存在の重要性については、最初に引用した「現代日本文学選集『和解』はしがき」の中で「姉」については「架空な人物」と示されているが、「弟」の場合はこのようない修飾語は使われていないことからも言える。このように志賀の作品においては兄及び弟という存在は珍しくなく、あえて「架空な人物」という扱いはしていないと思われる。この作品の場合も同様だが、「弟」は事実上虚構の人物だと言うべきだろう。他方、『和解』を含めて志賀の他の作品では妹の登場も頻繁に見られ、主人公の日常生活に時に大きな役割を果たす場合があるにもかかわらず、『或る男、

其姉の死』では妹ではなく「弟」という虚構の人物を採用したのはなぜだろうか。作者がしばしば言及する『和解』と本作品との関連性の面から考えると『和解』における妹の存在が本作品にないことは、二つの繋がりを弱めるものとなつていると言えよう。それにもかかわらず作者はなぜ妹でなく弟を登場させたのだろうか、作品の内容から考えて見てみよう。

或る男と云ふのは私の腹異ひの兄です。直ぐ上の兄ですが、年は十程違ひました。此兄は私が十八の暮れに自家を出て、それなり行方不明になつたのです。（二）

冒頭部である上記の引用部からは両者の年齢の差や弟と兄は繼兄弟であることが分かる。このことが認識される場面は他にもある。

（前略）祖母が、父との関係にだけ兄の家出を帰してゐるのは誤解なのです。私はそれをいつてやりたかつたのですが、腹異ひといふ事と兄の出た後、私が自家の財産をつぐ事になつた事が矢張りこだはりになつて、何となく云ひにい気がしたのです。（三）

傍線部の弟の考えの背景には、家を出る一ヶ月ほど前の「おどくしたまるで自信のない兄の様子」に彼が気づいたことがあると思われる。兄がこのような様子になつた背景にも父が関わっていないとは言えないだろう。

（前略）姉は妙に邪推深い所もあつたのです。（中略）兄の家出とか、自分の出はひりをとめられた事などから、それは全く誤解で、純粹に父の意志から出た事なのですが、その裏で

母が私だけに此家をつがせたいといふ考から何かしてゐるのではないかと云ふやうな女らしい邪推もして居るらしかつたのです。実子の私がいふのは可笑しいやうですが、それは確かに邪推です。(三)

先程「父との関係にだけ兄の家出を帰してゐるのは誤解」だと言つているのに、ここでは兄の家出は「純粹に父の意志」によるものだと言つている。両方とも弟の発言であるが、互いに矛盾している。そして、姉の「邪推」についてだが、兄にも同様な「邪推」があつたかどうかは言い難いが、弟は自身が異母弟であることを認識していることは重要だと考えられる。このような認識があるにも関わらず、公平に兄の立場を観察することができるのだろうか。

尚、兄と弟の性格はほとんど対象的に描かれており、「兄に結婚の話が起こ」(五) つた時、彼は父の介入を認めないので対して、弟は「父の選択で」(三) 結婚する。また、兄の行動は父に不快を与える場合が多くあるのに比して、弟の行動は父に不快をあまり与えない。他方、弟は「自分から結婚したいといひだした」時「母は未だ早いと叱りましたが、反つて父が賛成して」(三) くれたように父が直ちに賛成することは兄の場合はほとんどない。自分が本気でやりたいことが拒否された時の気持ちは経験したものでなければ正確に理解できないということを考えると、両者の性格や態度にこれほどの差異がある中で、弟は兄の心を本当に理解していたかという疑問が浮んで来る。また父に関しては、

父からの発言の描写もなく、父に対する兄の批判とそれへの弟の軽い批判と同情しかない。故に、父と兄両方に弟は公平な「同情」を持って観察できたと言い難い。

本作品において語り手の役割を果たす弟の登場の必然性については反対しようもないが、彼は兄の心を理解し彼の代表となつて、彼が直面した諸問題について発言できたとは言えない。兄の行き先の分からぬ点や突然姉の死に現れた場面からも弟の兄への理解不足が窺える。他方、弟が登場した理由について考えてみると、「兄」とそのきょうだいそれぞれが主人公の役割を分担したが、男性でないと(当時は)できない事柄(財産や家の継承など)がある点からも、男性の副主人公すなわち「弟」の登場が不可欠なものになつたと言えるのではないだろうか。

### 三 父子問題について

本作品においては兄と父との不仲の関係が主な内容となつており、先行研究においては、兄が父からの愛情を期待する点や兄の姉宛の手紙がとりわけ言及されている。これら二点は本作品における父子間の問題の理解のために大変重要だと考え、本論においてもこれらに注目したい。

まず、作中で父子間に起つた衝突について見てみたい。二十一から二十七にかけて見られる兄の結婚に関する話において両者の間接的な衝突があり、兄の意見に対しても父の反対が多く見られる。一方、両者が直接的に衝突する場面は以下のようである。

(前略) 最初の衝突は、兄が夏の休みに友達と奈良京都の旅行をするからと云つて父に旅費を貰はうとした時でした。父は頭から怒り出しました。(中略) 「直ぐ断れ。電話でも何でもかけて断つて了へ。怪しからん。俺は順序の違つた事は大嫌ひだ」／「ぢやあ、お父さんは私が正しく順序を踏めば許して下さいましたか?」／「それは解らん。許すかも知れないし、許さないかも知れない」／「此場合はどうなんですか?」／「だから解らんと云つてゐぢやないか」／「いいえ、僕には解つて居ます。お父さんは屹度お許しになりません」／父は変な苦笑をしました。(中略) 「行きたいからです、どんな場合だつて、これまでお父さんが気持よく僕の申し出しうをして下さつた事がありますか?」／「よろしい」父も亢奮して云ひました。(四)

自身が望んでいることに対する父から積極的な応えを貰えなかつたことに対する、兄の不満が窺える。以下の引用文と合わせて考えよう。

兄が如何に父からの愛情の印を見たがつてゐたかは次の事でも明かだと思ひます。／兄が本統に家を出て了つた、その二年程前のことでした。兄は自分の短篇小説を集めて、自費出版をしようとした事がありました。兄は父から五百円だけその為に出して貰ふ事にしました。(中略) 兄は改めて又其事を父に頼みに行きました。(中略) 「此前、もうよしたと云つて居たぢやあないか」と父は直ぐ持前の懐しい目つきをして云

ひました。／「よし切によしたのではありません。一ト先中止した意味だつたのです。(後略)」／「全体貴様は小説などを書いて居て将来どうする心算だ」／「兄はむつとして黙つて了ひました。／「第一小説家なんて、どんな者になるんだ」と父は軽蔑を示した調子で続けました。(八)

この二つの引用部にあるように、兄は経済的な面で父に父親らしい態度を取ることを期待している。金錢という形であつても父から愛情を示してほしかつたのであろう。

父と兄が本当に衝突らしい衝突をしたのはW川沿岸の鉱毒事件が急に八釜しなくなつた時に、演説会その他で刺戟された兄が鉱毒地を見舞旁視察に行くと云ひ出した時だと云ふ事です。(中略) 母の話によると、此衝突はかなり烈しかつたやうです。／(中略) 父は「自家の者が被害民に同情して居ると云ふ事がFの方に知れたら、第一俺が非常に迷惑する」と云つたさうです。(中略) 「兎に角Fは明治の偉人の一人として俺は尊敬して居る」と云つたさうです。すると兄は大きな声で「あれは悪人です」と云つたさうです。(十)

ここから、兄が父の社会的地位に敬意を払おうともしていないことが窺える。兄のこの言動はやはり父の誇りを傷つけ、父の激しい怒りを誘つてゐる。両者が衝突する場面では、兄が自分の希望を貰こうとするのに対しても、父は自分の立場や意見を主張し、譲りうとしない。これが両者の間の溝を決定的なものとしていると言えよう。

(前略) 兄は其年大学に入るのと並んで、夏服として、或る洋服屋で大学の制服を作らせました。其洋服屋は、一体ものの高い家でした。高い家で作らす事は、兄も多少気がひいて居たらしく、羅紗ではなくヘルと云ふ地で作らせました。(中略) 所が案の定、兄が其家で作つた事を知ると、父は頭ごなしに贅沢だと云つて怒り出しました。(中略) 所が、實際父も少し不用意だったのです、何故なら、父はその一ト月程前に小学校に通つて居る私の妹達の夏服を同じ家で作らして居るのです。兄の気持には、其事があつたに違ひありません。父は多少不愉快に思ふだらうが、それがあるから、明らかには怒りもしまいかんな風に兄は考へて居たらうと思ひます。所が頭から怒られました。兄も心で腹を立てました。(中略) 「仮縫ひが済んで、何でもかまはない。断つて了へ」と云ふ風に怒つたから兄も仕舞にたうとう本当に腹を立てて了ひました。(十三)

これらの引用のいずれの場合も、兄が自分の望みを叶えようとするのに対し、父がそれらに悉く反対していることが窺える。特に最後の引用部にあるように、兄と他の子供たちに対する父の扱い方は、平等とは言い難く、これを二で引用した姉の「邪推」の場面と合わせて考えてみると、兄は、自分が継子のような扱いをされていると感じていたのではないかと想像される。ここで兄と姉の考え方には、違いがあることに注目しておきたい。姉の「邪推」は、継母に対する直接的な「邪推」だったが、兄の、自分があたかも継子のような扱いをされているという感じ方は、姉宛の手紙

紙において書いた言葉「母上は実は立派な方と思つて居ます。義理の母上としては、これ以上望めない所まで何時もして下さいました。母上にはくれぐれもよろしく。そして僕の家出に就いては余り気をもまれぬやうにとお伝えください。(中略) 皆とのさういふ関係が父上との事の為めに犠牲になるのは悲しい気がします。」(三十二)から分かるように、兄の感じ方は、ひとえに父親のせいだと言えるだろう。

このような兄は、自身と父との関係について、姉宛に手紙を書く中で、今まで口に出せなかつたことを筆を通して述べている。作中二十七から三十二に渡る(時に丸括弧の中で「作者云ふ」)のような形式で、弟の言葉が挿入されている。手紙は、兄の父に対する感情を最もはつきりかつ直接的に表すものとして見られる。仙田倫太郎は、これは兄の「最も秘すべき内面告白が」表されているものと言つてゐる。手紙は、「姉さんは他人から死ねばいいと思われて居る事を痛切に感じた事がありますか。」(二十七)で始まつてゐる。続いて、「僕は色々な罪悪の中でも、他人を死ねばいいと思ふ程、気持の悪い罪悪はないと思つてゐます。」という。兄のこのような考え方の背景には、「兄の実母の姉」の「(前略)お父さんは、お前にはもう愛はない」と云うてなさるさうだ。死ぬものなら早く死んでくれる方がいいと思つてなさるさうだ」(二十七)があり、それに多大な影響を受けたことは、充分に考えられる。彼は手紙において以下のように語つてゐる。

父上は僕が戦争へ行つて死んで了へば、それは尚よい事だと思

つていらしたのだと。どうですか？姉さんはどうお思ひですか？私のひがみでせうか？確かに或る程度にひがみです。それは僕も知つてゐます。／然し、それは扱て措いて今度は去年の夏の怪我の場合に移ります。（二十八）

この引用部は兄が「徵兵にとられた時」と関わる場面であり、「入営後二週間目不健康の為に退営」（二十八）になつて戻つた後父があまり喜ばなかつたために、上のような考え方があき起こつたと思われる。一方、祖母の「非常」な喜びと「日頃信心の天照皇大神の掛物にお神酒をあげて、お辞儀をして居られました」（二十八）ことに注意したい。祖母の喜びには母親のような愛情があるのに対して父の言動からは父親らしい愛情よりも家の名譽が重要だつたことが窺える。

続いて先の印象を「扱て措いて」以下のように記している。

あの怪我で僕が不具者にもならず済んだと云ふ事は実際「命拾ひ」以上です。十に一つ、恐らく二十に一つのそれは場合でした。それが僕に来たのです。（中略）所が同時に、（中略）それとは全然反対な者が、僕の死ななかつた事を心から物足らなく思つてゐる事を感じたのです。（中略）「いつも死んで呉れたら……」といふ事を不図想ひ浮かべる、さういふ人が確かにある、さう僕は感じたのです。然し此考は不愉快ですから僕は直ぐ自ら打消したつもりでした。（二十九）

彼はこの考えを「不愉快ですから」「直ぐ自ら打消したつもり」

だつたにもかかわらず、寧ろこの考えに提はれてゐるようになわれる。兄の家出の時に父が「随分淋しい気持ちになつたらいいのです」（二）、「兄が本当に家を出る二年程前に父との衝突でひとまず家を出た時の」「其晚おそく父が帰つて来て、母からそれを聴くと、急に淋しい顔をして、「ああ、たうとう出て行つたか」と云ひました。そして、「どうしよう？どうしよう？」と繰り返して母に云つて居ました。」（八）、そして兄は自活の目的で小豆島へ行くことにした時の場面の「然し車夫が梶棒を擧げると、父は突然兄の方を向いて、少し低い声で、「なるべく早く帰つて来い」と云ひました。」（九）などを合わせて考えると、弟の觀察及び父の本音と兄が想像する父の心理には大きな違いがあることに注意が引かれる。二十九からの引用部に見られる兄の考え方には、伯母の言葉から受けた衝撃の影響を脱することができず、その苦しみから逃れることができないためだろう。

（前略）父上は全体僕に何を望んでいらっしゃるのでせう？（中略）恐らく父上は僕に今は何も望んでは居られないのが実際と思ひます。若し望んで居られる事があるとすれば、伯母さんに云はれた事を盾に取つて云ふのではありませんが、僕が死ぬ事です。僕が早く死んで了ふ事です。さう思ひます。（三十）

傍線部のように兄は言つてゐるもの、叔母に言われた言葉は兄の心を強く支配していふと言え、父がどのような時あるいは気分で

しんでいると考えられる。

前のやうな手紙を平氣で書いた事を本当に恐ろしく思ひます。何と云ふ無反省な人間でせう。僕は自分が父上から呪はれて居るやうに書いて居ます。然し、「そんならお前は如何だ」と、かう訊かれたら、僕はこれに何と答へられますか。若しも父上が、「そんならお前は俺が死んだ時にはツと息をつかないか」かう云はれたらいいでせう。逆も、「決して……」とは云へません。寧ろ、「屹度」です。屹度僕はほツと息をつくに違ひないです。こんな自分でありながら自分の事を棚にあげて、父上に対しても不服を並べてゐます。悪いのは僕です。僕だけが悪いのです。かういふ僕は父上が愛されないのは実に当然な事です。(三十二)

兄はこのように、前の手紙で書いたことを急に反省している。彼は姉宛にあの長い手紙を書いたことで多少気持ちが落ち着いたからこそ、このように考えられるようになつたと言えるだろう。しかし、「悪いのは僕です。僕だけが悪いのです。」のよう、今までと突然正反対の見方をしたり極端な表現をしているところを見ると、本当の冷静さを取り戻したとは言い難い。ここで傍線部は注目に値する。伯母が言つた「お父さんは、お前にはもう愛はない」を反映しているのではないだろうか。父からの愛について兄がどう考へていたか、作中の他の箇所も合わせて検討してみよう。

(前略) 兄は又かなり感傷的な方でした。一つは八つで実母を失つた事が何時までも兄の感傷にからまりついてゐたから

でもあつたやうです。(中略) 殆ど盲目的に兄を愛してゐた祖母だけの愛情は其母と雖も辿も持つ事は出来なかつたに違ひありません。(中略) 兄には何か祖母だけでは満たされない気持ちがありました。そしてそれを兄は矢張り亡き母の幻影に求めて居たのです。妙な事です。祖母の愛には飽き満ちながら、兄は尚も愛情を求めてゐたのです。結局兄はそれを父にまで求めてゐたのが本統だつたと思ひます。然し兄はそれをはつきりとは意識していなかつたやうです。(七) 実母の死は兄に深い影響を与えていたと言え、それは祖母の「殆ど盲目的」な愛情でさえも打ち消すことが出来なかつたようである。その代わり兄は、その欠けている部分を父の愛で埋め合わせようとしたのだろうか。

最初兄が何かにつけ苛々と無闇に父へ突掛つて行つた、その気持は確かに父に愛情を求めて得られない、其何かしら、やりきれない気分がそんな変な現れ方をしたに違ひなかつたのです。其頃の兄はよく泣きました。泣きながら乱暴な事を云ひます。(七)

成長期の兄は自分が求める愛情を享受することができないことに耐えられず、その欲求不満を、泣いたり乱暴なことを言うことによつて表現していたのである。兄がどれほど父からの愛情を求めていたかについて、引き続き作品を見てみよう。

これは、兄が小豆島へ行く時暇乞いに実家へ行つた時の場面である。この折父の「なるべく早く帰つて來い」というひと言を聞

いて「兄は一寸驚いたやうな顔をしました。そして父の顔をぢつと見つめました。父は幾分眼を落としましたが、其儘何んと一绪に何気なく顔を外らして了ひました。／兄は直ぐ又祖母の部屋へ引きかへして行きましたが、少時して私が其所へ行くと、兄は黙つて泣いて居ました。」（九）。彼は予想もしていなかつた父の言葉やその瞬间の父の態度から今まで見ることのできなかつた父親らしい愛情を感じ、涙を流したのである。ここからは兄が父からの愛情をどれほど期待していたかが分かる。しかしながら、父の温かい感情の表現が持続的でないのはこの時だけではなかつた。

（前略）父は北の或る地方に新しく農場を買つた、それを見にゆくのに兄を誘ひました。祖母も母も私も喜びました。兄も喜びました。兄は其前から父に対し自分の現した様子が、余りに粗野であつた事を悔いてゐた時でしたから、心から父の誘ひを喜んでゐました。／そして二人が出発の時、私は上野まで送つて行きましたが、父は自身は一等車に乗り兄は二等車に乗せて同じ列車で別々に行つたには一寸驚きました。（十三）

傍線部の兄が自身の父に対する態度を後悔していることは注意すべき点である。彼は父の一歩歩み寄つてくれたことを心から喜んでいるが、その後の父の行動を兄はどのように受け止めたのだろうか。弟は「父にも兄を本統に愛する事が出来たら如何にいいだらうと云ふ気はあるに違ひないので。が、扱二人顔を突き合

はせて見ると、愛情と云ふには未だ余りにかけ離れた感情が其所にウロ／＼してゐる事を互ひに感じ合ふ、それが、同じ列車に乗りながら、別々になつて行くと云ふやうな変な事をさせるのではないかと思ひます。」（十三）のように考えている。父は兄と肩を並べて何時間も過ごす自信がなく、それを避けたかつたという可能性が考えられる。やはり二人の間には一時的に暖かい感情が生まれてもそれを持続することができず、二人の間の溝は埋まるところがない。

このような父子関係の中で伯母から「お父さんは、お前にはもう愛はない」の言葉を聞いた事で非常に動搖した兄は、自身が願つていた父の愛はもう享受することができないと思い込み、あのような手紙を姉に書くに至つたと言えよう。

#### おわりに

以上に見てきたように、この作品では主人公である兄が自分の希望を通してこうとするのに対し父が次々と反対することなどが描かれている。兄は父を激しく非難しつつ、時に自分を省みることもあるが、本当に客観的な視点を獲得したかは疑問であり、二人の不仲の関係が最終的にどうなつたか作品からは読み取ることができない。本作品の設定から言えれば「弟」の登場は不可欠なものだつたと言えるが、彼は兄の心を充分理解し彼の代弁者となつたという程ではない。兄は弟に観察される対象でありながら、この作品の大きな部分を占める手紙の書き手としての存在感は非常に

大きい。作者が「〔前略〕父と子の不和を主人公の弟の立場で書いた。(中略)弟が両方に同情を持ちながら、批判的に書いたといふやうなものだつた。(後略)」と言つてゐるよう、弟は言わば「仮想の主人公」という立場を与えられている。が、兄の心の内を大いに語つてゐるのは結局兄自身が書いた手紙であり、弟の口を通してではない。言うなれば、手紙が兄を主人公たらしめたのである。

伯母の言葉は父に対する兄の疑いを決定的なものにし、兄に烈しい衝撃と非常な苦しみを与えた。その苦しみを姉宛の長い手紙において吐き出しが、それによって心の内の葛藤がどれほど解消されたかは分からぬ。伯母の言葉は手紙を書く動機となつたと言え、その言葉はまた、彼が欲求していた父の愛の享受の不可能性をも確信させたと言えよう。

『或る男、其姉の死』は「『和解』といふ小説と對になる作品」

だということは作者によつて強調されてきたが、一において行つた考察では、両作品のスタイルが違う点から考えると『或る男、其姉の死』を『和解』の対とする作品と言ふには無理があるのではないかということを指摘した。また、本作品が志賀直哉の作品における不和を描写する最後の作品となつたかどうかについて見てみれば、『暗夜行路』などにおいても父子の葛藤についてとりわけ描かれていることから、作者の中では父子の不仲の関係が未だ重い課題としてあつたことが推察できる。このように『和解』の発表の後の「調和の時期」の志賀の作品には調和が描かれてい

るとは必ずしも言えないだろう。大正八年発表の『十一月三日午後のこと』と大正十一年の『挿話』についても同じことが指摘できる。『十一月三日午後のこと』においては軍隊の在り方や訓練の様子、そこに見られる「一年志願兵」のひどく非人間的な扱われ方、『挿話』では戦場の異常な状態が主に描かれてゐる。そのたゞによる区分ではなく、作品の内容に基づく区分について考える必要があり、そのためにより多くの作品を視野に入れ、分析していきたい。

【付記】志賀直哉作品の引用は『志賀直哉全集』(岩波書店 一九九八(一〇〇一年)に拠る。傍線は総て論者の付したものである。改行部分は／で示した。また、旧字は適宜新字に改め、ルビは省略した。

#### 注

(1) 古川裕佳『志賀直哉の〈家庭〉女中・不良・主婦』(森話社 平成二十三年)

(2) 宮越勉『初期作品・未定稿の問題』(『一冊の講座 志賀直哉』有精堂 昭和五十七年)において「志賀直哉の初期」という場合、(中略)「或朝」(中略)から、「児を盜む話」(中略)までの六年間の文学活動期を指すのが適切であろう。「或る朝」以前は萌芽期、(中略)「城の崎にて」(中略)以降を第二期(中期)とするのである。とされてゐる。

(3) 明治四十三年の「白権」創刊から大正三年一月執筆の「児を盜む話」(白権)までの時期。

- (4) 大正六年五月発表の『城の崎にて』(『白樺』)から昭和三年に長編『暗夜行路』(『改造』)の熟筆を長期中断するまでの時期。
- (5) 昭和四年から八年前半までの、まさにプロレタリア文学全盛期にあたる時期。
- (6) 敗戦以後の時期になる。『灰色の月』(『世界』昭和二十一年一月)、『山鳩』(『心』昭和二十五年一月)、『朝顔』(『心』昭和二十九年一月)などがある。
- (7) 『日本近代文学大事典』第二巻(日本近代文学館 小田切進編 講談社 昭和五十二年十一月)、(本多秋五「志賀直哉」)
- (8) 『近代小説の読み方(一)』三好行雄編(有斐閣新書 昭和五十四年八月)
- (9) 同書
- (10) 須藤松雄「志賀直哉研究」(明治書院 昭和五十二年)
- (11) 『大阪毎日新聞(夕刊)』初出時の原題は、「或る男と其姉の死」である。「或る男、其姉の死」に改められたのは、大正十四年四月、改造社刊行の短編集『雨蛙』に収録される際である。
- (12) 「或る男、其姉の死」(細川書店 昭和二十二年)
- (13) ところが、論者が「志賀直哉『和解』における〈自己〉——父子関係を中心にして」(『阪大近代文学研究』第八号 大阪大学近代文学研究会 平成二十二年三月)において、「前略」不和の根本にはやはり「自分」自身の頑固さや自己中心的な態度が深く関わっている」という考察を行っている。
- (14) 昭和十三年六月の「続創作余談」においては、「或る男、其姉の死」これは「和解」の後に書いたものだが、作の内容から云へば「和解」の前に入れるべきものだ。「和解」は捕りたての生魚。「或る男、其姉の死」は同じ魚の干物だ。この作品は少しく陰気臭く、愉快な作品でないから、私は余り愛着を持たないが、書く時は、相当骨が折れたやうに記憶する。好きでなくとも、此作品
- (15) は私には矢張りなくてはならぬ物だと云ふ意味で認めてゐる。と記しているが、これにおいても「あとがき」で述べたような表現「不和の事實」についてこの作品に「丹念にその原因を追及して書いたつもりである」一言も發言していない。ただし、「：此作品は私には矢張りなくてはならぬ物だ」とは、「あとがき」において記した内容を示唆しているのではないかとも言われるかもしれないが、「和解」と異なる創作方法から考えてみれば、本論で指摘した疑問はまだ残る。
- (16) 仙田倫太郎「『或る男、其姉の死』論」(『徳島文理大学文学論叢』二十六巻 平成二十一年三月)、伊藤佐枝「有限の『作者』志賀直哉『或る男、其姉の死』の語り手」(『論樹』十二巻 平成九年十月)など。
- (17) 下岡友加「志賀直哉『或る男、其姉の死』論——『事実と作り事との混合』という方法をめぐって——」(『国文学攷』百六十巻 広島理科大學國語國文學會 平成十年十二月)、「暗夜行路」との比較は中村完は「『暗夜行路』と『或る男、其姉の死』」(『日本近代文学』二十三巻 昭和五十一年十月)や西山康一、庄司達也「志賀直哉と『大阪毎日新聞』」、「或る男、其姉の死」「暗夜行路」背景考」(『岡大国文論稿』四十一巻 平成二十五年三月)などにおいても見られる。
- (18) 富沢成実「志賀直哉『或る男、其姉の死』論——草稿類との比較を通して——」(『明治大学教養論集』三百七十七巻 平成十六年一月)
- (19) 伊藤佐枝「有限の『作者』志賀直哉『或る男、其姉の死』の語り手」(『論樹』十一巻 平成九年十月)、池内輝雄「或る男、其姉の死」(『論樹』十一巻 平成九年十月)

の死」論」（『大妻女子大学文学部紀要』四巻 昭和四十七年三月）  
「後に、池内輝雄『志賀直哉の領域』（有精堂 平成二年八月）に  
収録）において、氏は夏目漱石『こゝる』の影響について指摘さ  
れている。

(20) 富沢成実「志賀直哉『或る男、其姉の死』論—主人公の変貌を  
めぐって—」（『明治大学教養論集』四百四巻 平成十八年三月）

(21) 仙田倫太郎

(22) 下岡友加

(23) 富沢成実「志賀直哉『或る男、其姉の死』論—主人公の変貌を  
めぐって—」

同上

(24) 仙田倫太郎「『或る男、其姉の死』論」

(25) 仙田倫太郎「『或る男、其姉の死』論—草稿類との比較  
を通じて—」

下岡友加

(26) 富沢成実「志賀直哉『或る男、其姉の死』論—草稿類との比較  
を通じて—」

『志賀直哉全集 第八巻』

(27) 上記の伊藤佐枝などの場合はそう言える。

仙田倫太郎

(Mohammad Moinuddin 本学特任助教)